

二〇二〇年度 卒業論文

石山合戦を主軸とした本願寺の戦争倫理

コピー 厳禁

生駒 勝久
L17004

目次

序論	1
本論	2
第一章 蓮如と加賀一向一揆	2
第一節 蓮如の教学	2
第二節 加賀一向一揆の始まりと結果	3
第三節 本願寺の組織構造	5
第二章 石山合戦	7
第一節 石山合戦の起こりについて	7
第二節 石山合戦―元亀年間の争乱―	13
第一項 逆賊本願寺勢力と官軍織田家	13
第二項 逆賊織田家と官軍本願寺勢力	15
第三項 本願寺の再蜂起と終戦	16
第三章 本願寺の教えと戦争倫理	21
第一節 親鸞の死生観	21
第二節 戦争へ向かう真宗	24

コピー厳禁

結論

.....

26

註

参考文献

コピー厳禁

序論

浄土真宗は親鸞聖人の教学により始まり、第八代宗主である蓮如上人により発展した大乘仏教の宗派の一つである。蓮如上人により隆盛を極めたこの浄土真宗であるが、組織の規模が拡大したことによってとある問題が生ずることとなった。それは宗教という民衆の心の拠り所を中心として一枚岩となったように見える教団を恐れ、またはその利権を狙った守護や守護大名との争いであった。それらの争いは長期間、広範囲に及ぶこととなり一向一揆と呼称された。大小様々な規模での戦争が幕を開けることとなり、その争いの渦中で多くの人間が命を落とすこととなったのである。

本論文では加賀一向一揆を起点として石山合戦がなぜ起こったのか、そしてなぜ十一年という長い期間に亘って継続したのかを考察する。第一章では蓮如上人の教学と加賀一向一揆について触れ、一向一揆の発端について論じていく。第二章では頭如上人と浄土真宗を取り巻く情勢と石山合戦の起こり、そして長期化した要因について論じていく。第三章では浄土真宗の死生観と開戦の理由について、主に親鸞聖人の死生観に触れて何故浄土真宗が戦争に向かったのか。また門徒をこれだけの長期間どのように争わせたのかについて論じていく。戦争における善悪は度外視し、どのように戦ったのかに焦点を当てる。

本論

第一章 蓮如と加賀一向一揆

第一節 蓮如の教学

蓮如は本願寺教団の中興の祖と仰がれている。蓮如の教学として最も特徴的なものは『御文章』というお手紙を用いた伝道方法だ。西本願寺では御文章、東本願寺では御文と呼称されるこれらは蓮如からのお手紙であり、後の宗主実如が編纂されたものである。合計すると二百六十通程度の御文章が確認されている。その内容は信因称報が基底にあり、宗祖の教義を平易な文章で表現した。このお手紙は門徒に授与された。さらに名号の下附を行なった。これは門徒に対して六字名号を与えるもので、「南無阿弥陀仏」を墨書した名号は礼拝の対象となった。門信徒の結びつきはこの名号と先の御文章の読み上げを聞くことによつて強固なものとなつた。その中で蓮如は御同朋御同行について説いている。それは同じ念仏行に生きるものや相互に信頼し、仲良く、尊敬しあう仲間であることを意味する言葉である。この蓮如の主張は親鸞の主張を引き継いだものとしている。『御文章』の一帖では

「そのゆゑは、如来の教法十方衆生に説ききかしむるときは、ただ如来の御代官を申しつるばかりなり。さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如来の教法をわれも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり。そのほかは、なにををしへて弟子とはいはんぞ」と仰せられつるなり。さればとも同行なるべきものなり。これによりて、聖人は「御同朋・御同行」とこそ、かしづきて仰せられけり。

とし、親鸞の心から大切にしたものであると自身の主張を裏付けた。蓮如は教学において御文章での平易な文字による布教と並んで更に講という信仰集団を形成した。講とは御坊や道場に門徒たちが集まり、彼らのために文字を読める者が御文章を読み上げた。蓮如はその中で門徒たちに信心や教義について語り合うことを推奨したのである。加茂順成氏は「真宗的伝道―「御文」と「講」の仕組みに学ぶ―」において

「講」には「ネットワーク外部性」があった。これは「各個人の効用が独立ではなく、他人の所有や加入状況に依存していることを表す概念。」である。電話の加入率のように、普及の「臨界量」を超えたら爆発的に普及する現象である。

と述べられており、当時のような電話や電子メールもなく情報伝達手段に乏しい時代において素早い伝道を可能とする組織であった。また講は道場という簡素な場所であったということとで親近感もあり、民衆に深く浸透してその規模を拡大した。

第二節 加賀一向一揆の始まりと結果

加賀一向一揆は長享二年頃から天正八年にかけておこった門徒たちによる一揆である。その発端は、応仁元年に勃発した応仁の乱に影響を受けた加賀の守護大名、富樫家で起きた内紛にある。当主の富樫政親が蓮如のもとへ集っていた加賀周辺の門徒たちに接近し、当主の座を争う弟の富樫幸千代を追放した後、本願寺門徒の保護を条件に掲げて救援要請を行った。これを受諾した門徒たちは戦争を展開することとなった。『蓮如上人―その教え

と生涯に学ぶ―』では、

政親側に本願寺門徒が加入したのに対して、幸千代側は高田門徒を味方としたので、真宗門徒同士の戦いの様相を呈しましたが、本願寺門徒の勢力は圧倒的に優勢でした。それは蓮如上人の教化の影響により、村ぐるみ門徒化した地域が多かったうえに、それら門徒群を組織化する坊主・国侍など在地指導者がいたからです。

とされ、第一節にて述べた蓮如上人の伝道方法の一つである講の形成が、計らずも戦争を優位に展開する要因となってしまうのだ。

こうして当主富樫政親は内紛に勝利したのである。これが文明の一揆と呼称される加賀の在する北陸での最初の一向一揆であった。こうして富樫政親は名実ともに加賀の守護大名となった。しかし門徒たちの強さに脅威を感じた彼は本願寺門徒らと先に交わした参戦条件を破棄し、抑圧を開始するようになった。富樫家と門徒たちの間で不穏な空気が流れる中蓮如は富樫家への抵抗を決意した。しかし当時の蓮如は抗戦を主張していても、無差別の戦闘行為を望んでいる訳ではなかったと考えられる。そのことは『蓮如上人―その教えと生涯に学ぶ―』にて、

蓮如上人は、本願寺と仏法の危機に際し、多屋衆の意見に賛同して領主に対する抵抗を決意したことがありましたが、基本的には一向一揆をおこすことには反対でした。加賀受得寺の栄玄の記した『栄玄聞書』によると、上人は武士・侍は「法敵」に等しい者と考えられていたようです。むろんここで示されている武士と

は、農民と一体化し門徒となっているような地侍を指しているのではなく、領主権力につながる武士階層のことです。

と述べられていることから分かる。しかし一向一揆を否定する蓮如の思いは届かなかった。吉崎は炎上し、蓮如は文明七年、退去を余儀なくされたのである。不満が溜まり続けた門徒たちは蓮如の手を離れ、高尾城へと侵攻を開始した。結果として富樫政親は自害し、加賀は守護大名不在の国となった。この一揆の結果以降、当時の加賀は「百姓の持ちたる国」と呼称されるようになった。次章にて述べる織田信長と本願寺顕如が争った石山合戦において本願寺勢力が敗北するまでの間であるおおよそ九十年間、門徒たちが守護大名に代わり加賀の地を統治した。

第三節 本願寺の組織構造

多数の人々を束ねる上で、組織構造という概念は必要不可欠なものである。本願寺の詳細な区分は金龍静氏が次のように述べている。

本願寺は、蓮如の主張する信心為本の教説を受けとめた人々に対し「直参」という身分を付与し、個々に直参坊主分としてあるいは集团的に直参衆として、彼らを教団の直接的成員としていったのである。直参身分とは、呼称通り、本願寺宗主に直接参じうる身分のことである。本願寺から見た限りでの身分であり、それ故直参分であると同時に従来通り「〇〇寺門徒」であり続けても矛盾しない。直参分の多くは各地の有力坊

主であるが、中にはその坊主の有力門徒（「門徒之坊主分」）とか、「大坂六町衆」といった町衆、さらには加賀の俗躰の有力指導者たる「郡」衆も含まれていた。

とある。有力者を自分の元に統括し、管理する中央集権的な支配体制を確立することで戦に備えたと見ることが出来る。このように頭を分散することで細かな指令伝達を淀みなく行うことに成功したのである。

更に宗主である蓮如の支配体制が盤石であったのかという点も論じたい。ここでの支配とは暴力を伴うものではない。精神的なものである。平易に表現するのであれば信頼されていたのかということだ。一向一揆を成功に収め、一国を統治したのだから当然信じられてはいたのだろう。しかしその信頼は戦果以外にも確認することが出来る。それは蓮如の死後に表出する。五木寛之氏は当時の門徒たちの様子を次のように述べている。

教団内のショックは、清盛を亡くした平家一門、信長を失った織田軍団のそれと同じだった。「前日に大地が鳴動した」「石山御坊に二尺の大花が舞った」。迷信や神秘的な出来事を否定する教団自身の文書が、こう語り継いでいるところに蓮如の死の非常な重みがはしなくものぞいている。

とある。その衝撃の大きさは果てしないものであったことが想像できる。一一八一年の平清盛の没後、平家は目に見えて弱体化した。そして一一八五年に壇ノ浦の戦いにて平家は滅亡している。そして織田家は織田信長の没後、一五八二年の清洲会議において家中は羽柴秀吉と柴田勝家が信長の血縁者をそれぞれ擁立し独立したことで大きく分裂した。これらのことから強力な支配者の死は被支配者たちに少なくない動揺を与えるということが理解できる。しかし本願寺教団はその没落に倣うことはなかった。八代蓮如以降、本願寺教団は九代実如、十代証

如そして十一代顕如に至るまで権勢を維持したのである。それは偏に権力の主体が宗主である人ではなく法、仏法にあったことが理由であると考えられる。

第二章 石山合戦

第一節 石山合戦の起こりについて

石山合戦は元亀元年から天正八年までの約十一年間にわたって起こった。天下布武を掲げて天下統一を目論む織田家当主織田信長と、本願寺の第十一代宗主本願寺顕如の間で行われた戦争である。ここではまず『戦争の日本文』¹⁾『一向一揆と石山合戦』を参考にまとめる。室町幕府第十二代将軍である足利義晴の子である足利義昭を擁立することで京への足がかりを得て入京を果たした織田信長は、足利義昭を第十五代将軍とし京都に政権を樹立した。京を手にし影響力を拡大させた織田信長に対し、本願寺は門徒に蜂起を促し、自らも蜂起し大坂に籠城した。断続的ではあるが、本願寺勢力は織田信長と戦い続けた。天正八年、本願寺側の事実上の降伏によって顕如は大坂を退去して終わった。この戦いが石山合戦として認知されている。石山合戦の引き金とも言える本願寺蜂起の起こりは元亀元年九月だった。織田信長は将軍として擁した足利義昭と共に摂津国野田・福島にたて籠る三好政康・三好長逸・石成友通の三人、三好三人衆と呼ばれる彼らと交戦状態にあった。九月十二日の夜半、本願寺は突如として織田家及び足利義昭を急襲したのである。不意をつかれた織田家は急遽朝廷に申入れ、本願寺

側の戦闘行動中止を訴えて勅使の派遣を要請した。このことは公家の山科言継の伝聞である『言継卿記』にも記述があり、

自禁裏召之間參之處、大坂へ爲勅使予、柳原中納言明日可罷下、烏丸一品一昨日上洛、可同道、諸事可申付云々、俄之儀被迷惑御請申候了、⁸

と記されている。禁裏とは皇居のことである。更に一昨日上洛した烏丸一品とは同じく『言継卿記』にある

廿七日、壬戌、天晴、自辰刻雨降、烏丸一品攝州へ出陣、五六十人有之、正親町同道也、⁹

という記述と合わせて永禄十三年に摂津に布陣し、上洛しているということから織田信長のことであるとわかる。突如としての朝廷への要請は特に大事であり、足利義昭と織田信長が慌てていたことが推測できる。本願寺の蜂起が世間にとって予想外であったことは『言継卿記』に

十三日、戊寅、雨降、晩頭雑説、大坂謀反一揆發云々、

と記されているのだ。同時に、本願寺の蜂起は禁裏では大坂の謀反と捉えられていたことが窺えるのである。

しかし顕如は諸国の門徒へ、信長が本願寺へ強要した「難題」に応じたにもかかわらず、本願寺を「破却」すると勧告していると告げている。この難題とは織田家が本願寺に対して要求した矢銭五千貫のことであり、本願寺側はこれを呑んでいる。神田千里氏は軍事の天才である信長が不意打ちを受ける状態を放置するかという点に疑問を抱き、次のように述べている。

十月七日に顕如が筑後、讃岐、近江など諸国の門徒へ通達した戦闘命令では、未だに信長から「難題」の強

要が続いていると記されているのみで、本願寺破却の通告には触れていない（『大谷派本願寺文書』『西福寺文書』）。門徒に蜂起を促す上での重要な案件が、一月後の檄文から消えているのも釈然としない。義昭・信長には本願寺を攻撃する意図はなく、本願寺から信長へ不意打ちをしかけたと考えられる。

信長に本願寺への敵意はこの時点ではなかったと考えられる。何故ならば、上洛直後である現地の有力者、三好三人衆と争い続けている状況において、無駄に争いの火種を周囲に撒くとは考え難いからである。

本願寺勢力は精強であり士気も高かったのは事実である。宗主の元で宗教を介して一枚岩であったからだ。しかし戦を専門としない彼らは一般的に考えるならば勝ち目はなく、筑後や讃岐、近江で挙兵しようとする戦を専門とする兵士を有する軍を持つ織田家からすれば風により散る塵にも等しかっただろう。だがそのような結果にはならなかった。本願寺勢力は三好や浅井、朝倉、武田家と同盟を締結したのである。近江では湖北の寺院が浅井長政と連携して交戦し、武田家当主武田信玄は本願寺を支援した。当然本願寺も門徒を動員している。本願寺宗主や家老たちが門徒たちに出した戦闘の指示をはじめとする命令書を見ると、門徒たちは地域ごとの集団や檀家たちの集団、講に所属していたことがわかるのである。国だけでも現在の福岡県に位置する筑後国、香川県に位置する讃岐国、石川県に位置する能州つまりは能登国のことであり、福井県に位置する越前国及び若狭国となる。

このように南は福岡県から北は石川県までの広範囲に本願寺勢力の力は及んでいた。内部事情を十分に知らない織田家から見れば、これに郡や村、町が加われば情報伝達手段が乏しく周囲を俯瞰する技術もない当時では、認識範囲を越える本願寺勢力は未知数であり、織田家にとって想像を絶するほどの脅威であることが窺える。この

頭如消息の大きな結果として、御書に応じて伊勢長島の門徒が挙兵した。尾張の小木江城（愛知県・愛西市）を攻め落とし、城主であり織田信長の弟である織田信興は自害した。当時の状況は『信長公記』に記されている。

この本願寺の蜂起以降、織田家は四年間長島にて戦い続けた。長島一向一揆は確実に織田勢力に苦戦を強いた。織田家は本願寺の勢いに圧され多くの縁者、家臣を失ったのである。しかし後述する比叡山焼き討ちと結末に変化はなかった。『信長公記』には次のように記されている。

七月十三日に 島中の男女貴賤不知其数長島又ハ屋長島 中江三ヶ所へ逃入候既三ヶ月相拘候間過半餓死仕候

九月廿九日 御陀言申長島明退候除多の舟に取乗候を鐵炮を揃うたせられ無際限川へ切ひてられ候其中心有者ともはたかに成伐刀計にて七八百計切而懸り伐崩し御一門を初奉り歴々数多討死小口へ相働留主のこ屋くへ亂れ入思程支度仕候てそれより川を越多藝山北伊勢口へちりくに罷退大坂へ逃入也 中江城 屋長島の城 兩城に在の男女二萬計幾重も尺を付取籠被置候四方より火を付焼ころしに被仰付属御存分

このように織田勢は戦意の区別なく、あらゆる手段を用いて長島の地にて敵対した勢力の關係者を根絶やしにしたのである。この根切りが後述する比叡山焼き討ちと共に織田信長の悪名を補強した事例の一つとなった。しかしこの根切りは戦闘要員、非戦闘員を全て惨殺した行為であるが、民衆へのアピールであると神田千里氏は自身の著書にて述べている。

織田信長の長島攻めは、長島願証寺をはじめとする一向一揆勢力の危機管理能力に破産を宣告するものであった。言い換えれば降参を許さない「根切り」とは、一向一揆勢に寄せる長島住民の信頼を壊滅させるものだったといえよう。「百姓は草のなびき」との戦国時代の諺通り、戦国の民衆は何よりも領民を保護する力のある強い領主を求めた。民衆を敵方の大量殺戮に曝すような領主は、年貢を取る資格もない領主失格者の烙印を捺されることになるのである。

このように信長は民衆を殺すことによって、同時に本願寺側が背負う民衆の、自身の命と財産を守ってくれるだろうという期待を殺すという目的があった。信長自身、家族や家臣を殺されていた事実には恨み骨髄に徹していたであろうことは想像に難くない。川端泰幸氏はこの根切りについて次のように述べている。

一揆には徳政一揆や土一揆、荘家の一揆などさまざまなものがあるが、それらはいずれもある目的（要求）を伴っている。例えば年貢減免や非法代官の解任、債務破棄など目的とするところは誰が見ても明らかである。しかし一向一揆に限ってはそのようなことが、少なくとも当事者である信長にとってみれば見えなかったのではないだろうか。目的の見えない一揆に対する不安や苛立ちが、信長を「根切」という行動に突き動かしたものと考えられるのである。それは信長だけでなく、現場で戦った武士たちにしても同様であったはずである。長島一向一揆とは、織田武士団にとって、そのような意味で「一揆」に対する強い警戒感を植え付けたものと考えられよう。

これらの事から、根切りには鬱憤を晴らすことが目的であったことは否定できない。しかしそれ以上に敵の氣勢

を削ぐ目的があったことが理解できる。

また、本願寺側の戦意についてだが、大名家と対等にそして長期間戦い続けるには精神的な拠り所が必要である。従来の一揆では自分の生活を楽にしたい・不作が続いたため、税を免除してほしい・家族の生活を良くしたい。そのような思いが軽いとは言いがたいが、それだけで多くの戦を経験した大名家と戦い続けることは不可能だ。では拠り所とは何か。それを神田千里氏は次のように述べている。

法主の命令が大きな動員力を発揮しえた。単に上意下達の関係で実行されるわけではなく、門徒団の合議という一見リベラルな過程をへながらも、末端の構成員までの同意がとりつけられていた。本願寺の上からの監視のみならず、末端からの監視にも支えられて、たやすくは背き難い鉄の規律を生み出したからである。さらに規律違反による教団の制裁は門徒たちの死後の運命に、浄土往生の可否という彼等の最大の関心事に関わっていた。本願寺が掟に背いた門徒は地獄に堕ちる、などと言ったわけではない。だが全門徒の一揆の頂点に立つ法主は、門徒を地獄に落とす権能をもつと信じられていた。これらの背景となる事情が本願寺の軍事的動員力を支えていたのである。

精神的な拠り所とは本願寺の掟、仏教である。そして旧来の一揆との相違点は現在の生活を守ることにあつた。しかしこの一向一揆では、守る対象が変わつたのである。苦しさに耐えかねた民衆は死後へと希望を見出した。現世利益を目的とせず、当来利益である往生を目的とした浄土真宗の教えは、現世に絶望した民衆にとって最上の救いであつたと考えられる。このように本願寺側は群集心理を巧みに操作した。宗主である顕如がこの扇動

行為を目的として行ったとは考え難い。しかし事実として本願寺は門徒たちの心に宗教という形で入り込み、主には特別な権能があるという認識を植え付け、虚像を生み出すことに成功した。

第二節 石山合戦―元亀年間の争乱―

第一項 逆賊本願寺勢力と官軍織田家

前節で述べた通り、本願寺勢力の強大さが石山合戦を長期化させたことは疑う余地がない。しかしそれだけで争い続けられるほど戦国時代の他大名とは厭戦的ではない。介入があったことは明らかである。戦争の流れは、神田千里氏の著書である『頭如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』参考にしてまとめられる。初めは元亀元年の争乱である。第二章第一節にて取り上げたが、ここでは後に四面楚歌となる織田家の敵を明記する。三好三人衆、六角承禎・義治の父子、そして浅井・朝倉連合軍である。三好三人衆との戦いは一般的に淀川堤の戦いと呼称され、本願寺側は摂津福島に布陣する織田家を、本願寺を破却すると宣言した事を受け、介入する形で出兵した。急襲に驚愕した織田家の行動に関しては前述の通りであり、早期に和議の成立をもって決着した。六角親子に関しては浅井・朝倉と結び佐久間信盛・柴田勝家を襲ったが、義昭の介入により和睦した。後に金森御坊の一向一揆と結んで、再度織田家を攻めたが敗北した。浅井・朝倉連合軍との戦いは、姉川の戦いと呼称される有名な合戦である。その後、両連合軍と和睦を成すが翌年元亀二年、一五七一年早々、浅井家と織田家は戦を再開したのである。八月に織田家は勝利した。次いで九月十二日、後世に残る悪名高き比叡山焼討を敢行した。この時の状

況は『信長公記』において次のように記されている。

九月十二日 叡山を取詰本中堂三王廿一社を初奉り靈佛靈社僧坊經卷不殘一字モ一時に如雲霞焼拂爲灰燼之地ト社哀なれ山下ノ男女老若右往左往み致癡忘取物も不取敢悉かはたしにて八王子山へ逃上り社内へ逃籠諸卒四方より関音を上て攻上ル僧俗兒童智者上人一々に頸をきり 信長之懸御目は者於山頭無其隱高僧貴僧智之僧と申其外美女小童不知其員召捕召列 御前へ参り惡僧之儀者不及是非是者被成御扶ケ候へと聲々に雖申上給中々無御許容一々に頸を打落され目も當られぬ有様也数千之屍筭を亂し哀成仕合也年來之被散御胸臆訖 去而志賀郡明智十兵衛に被下坂本に在地候之也

このように僧俗問わず、その地にいる者たちを塵殺する根切りの実態が窺える焼討であった。逆らえば、逆らった者だけでなくその周囲、また今回であれば經典や堂等財産をも焼き尽くす苛烈さが垣間見える。

比叡山にて僧兵たちが争っていたこの間、石山本願寺本拠での戦いは起きなかったが、各地の一向一揆では織田家との交戦が続いていた。しかし本願寺は攻勢ばかりではなかった。本願寺は越中、加賀を越後の上杉家に脅かされていたため、婚姻の好に訴えて武田信玄に対して本願寺方の椎名康胤の支援を要請していた。頭如の妻と信玄の妻が姉妹という関係が主であるが、武田信玄もまた六角義賢のようにその名が法名であり、武田信玄自身が本願寺に好意的であったことも支援理由に含まれると考えられる。しかし、信玄はこの時点で旗色を明らかにしていなかった。一五七二年、遠江・三河に拠点を置く徳川家康に攻撃行動を開始した。三方ヶ原の戦いと呼称される。この戦で織田家と同盟を結ぶ徳川家は武田家に敗北を喫したのである。武田家が本願寺に味方すること

で戦局が大きく動いた。

第二項 逆賊織田家と官軍本願寺勢力

戦局は動こうとも織田家側が幕府側であり、本願寺側が反逆者である事実には変わりはない。しかしこの前提に変化が生じる。足利義昭と織田信長は一枚岩ではなかった。將軍としての統治を望む義昭と傀儡としての將軍を望む信長は表面上は蜜月関係であったが、見えない不満は確実に存在した。その内での武田信玄の勝利により義昭は動いた。元龜四年、義昭が信長の手中を離れたのである。そうして義昭は本願寺側へと合流したのだ。当然、公権力を掌中に収める機会を逃す顕如ではなかった。本願寺は義昭を受け入れたのである。その事実は神田千里氏の著書にてこのように記されている。

翌元龜四年二月、足利義昭は浅井・朝倉・武田との連繫により、織田信長に対立して光浄院暹慶を西近江で蜂起させる。暹慶は本願寺一族寺院慈敬寺に率いられた本願寺門徒勢とともに石山・今堅田で蜂起した（『慈敬寺文書』二月十三日顕如消息、『顕如上人文案』上・二月二十七日消息等）。元龜元年には本願寺の蜂起に対して「かの信長と御一味」し、本願寺に対して「御義絶に及ばれた」義昭（『勸修寺文書』下間証念書状）であったが、今度はその義昭に味方して本願寺が教団をあげて蜂起することになった。

この結果、織田家と本願寺側の立場は逆転した。しかし本願寺が幕府側となろうとも織田家を追い込むことはできなかつた。浅井、朝倉家そして武田家更に幕府を味方にした本願寺側がなぜ勝利できなかったのか。大きな理

由として三つが挙げられる。第一には元亀四年三月に起こった足利家と織田家の戦いである。義昭は今まで信長と共に敵対していた三好三人衆たちと結んで挙兵した。結果として足利家は惨敗した。信長によって上京は焼き討ちされ、四月に正親町天皇の勅令で両家は一時、和議を結んだ。第二には武田信玄が病没したためである。当時武田家は武力の最高峰のような扱いを周辺大名から受けていた。その武田家が味方となった本願寺側の安堵は計り知れない。しかし信玄の病没によりその勢いは失われた。第三には幕府の滅亡である。義昭は六月に毛利家の兵糧など物資面での協力を取り付けて、七月に織田家に対して再挙兵した。槇島城の戦いと呼称される戦である。結果として義昭は敗北し嫡男の足利義尋を人質として降伏し、信長によって追放された。

この三つの出来事により本願寺側は氣勢を削がれた。更に追い打ちをかけるように織田家は朝倉家を一乗谷の戦いにて滅ぼし、続いて浅井長政を小谷城の戦いにて自害させ浅井家を滅ぼした。この結果を受け本願寺は織田家に和議を申し入れ、信長はこれを受け入れた。こうして元亀年間の戦争は終息した。

第三節 本願寺の再蜂起と終戦

前節の通り織田家は幕府を滅亡させ、浅井・朝倉家を滅ぼし、北近江・越前を平定した。更に本願寺と和議を結び、戦争は一端終結したのである。しかし同年、天正元年に越前にて一向一揆が発生したのだ。一揆の発端を神田千里氏は自身の著書にて次のように述べている。

天正元年八月、織田信長は越前に侵攻し、信長との合戦に敗北した朝倉義景は一族の朝倉景鏡や家臣前波（後

に桂田)長俊の寝返りなどによって滅びた。桂田長俊は信長から越前守護代に任命されたが、国内の武士たちと対立し、国人富田長繁とこれに与した一揆によって滅ぼされた。一揆は余勢をかって北庄に駐留していた信長の奉行三人衆、すなわち木下祐久、明智光秀の代官三沢秀次、津田元嘉を追放した。越前で一揆が蜂起したとの報は、正月十六日以前には信長の許に注進され(『千福文書』正月十六日織田信長朱印状)、『信長公記』によれば桂田長俊の戦死と越前国が「一揆持」になったとの報は正月十九日に伝えられている。

このように国人と一揆衆は共闘し、桂田長俊を打倒したが、『尋憲記』によると「廿七日 一、越前国衆搞(原文ママ)田播馬(原文ママ)守切腹畢、余悉之儀有之間、切腹スル也、更信長へ対シテ非別心由、」とある。国人の主張は、守護への攻撃、そして結果としての切腹はあくまでも長俊への敵意であり、信長への敵意ではないといったものだ。この対立により越前は富田長繁が守護となった。しかし守護となった長繁は自身及び長俊と同じく朝倉家の旧臣、魚住景固を滅ぼしたため、危機感を抱いた同じく旧朝倉家の朝倉景健が反発した。景健は本願寺を頼り、天正二年「国中一揆」を起こした。本願寺側は加賀より七里頼周を向かわせ、長繁を滅ぼしたのである。こうして越前は加賀同様、百姓の持ちたる国へと変貌したのである。本願寺は越前に守護として下間頼照を派遣した。だが加賀のように本願寺の支配体制が続くことはなかった。天正二年に長島一向一揆を殲滅した信長が、天正三年に越前を攻撃したからである。これまでのように越前一向一揆の結末も「根切り」であった。『信長公記』によると

八月十八日、柴田修理亮、惟住五郎左衛門、津田於坊両三人、鳥羽之城へ取懸攻破、五六百被切捨候也、金

盛五郎八、原彦次郎、郡上口、によろ、とこの山より大野郡へ打入、数ヶ所小城共攻破、数多討捕、諸口より手を合放火候、依レ之國中之一揆既致ニ廢忘一、取物も不ニ取敢一右往左往に山くへ逃上候、則諸卒四手に分させられ、賀州迄も推次第、山林を尋搜而不レ隔ニ男女一可切捨之旨被仰出候、八月十五日より十九日迄、御着到之面諸手より搦捕進上候分、一万式千式百五十余被切捨、御小姓衆へ被仰付誅させられ、国くへ奪取来男女不レ知ニ其員一、或ハ切捨或者生捕と誅させられたるとは凡可レ及ニ三四万^{ニモ}一と申キ

このように記されている。ここでも「男女」と表記があることから、越前でも比叡山や長島と同様に根切りが行われていたことが窺える。越前での本願寺の統治は短期間に終わった。信長は次いで大坂へ攻撃を開始した。

本願寺側は義昭を受け入れたことで元亀争乱において劣勢となったが、嫡男を人質に差し出し追放された室町幕府最後の將軍義昭は自身の復権、幕府の再興を諦めていなかった。毛利輝元・武田勝頼・北条氏政・上杉謙信が義昭の呼びかけに応じて反織田家として旗色を明らかにした。元亀以来の織田家包囲網が形成されたのである。この動きを神田千里氏はこのように述べている。

これまでみてきたように、本願寺の動きは、天正元年以前は、義昭・信長政権に対抗する諸大名の動きと連動し、天正元年以降は、足利義昭とこれに味方する諸大名と連動していることが分る（原文ママ）。決して本願寺のみが前面に出て信長と戦っているわけではなく、特に天正四年以降の籠城戦は、諸大名の反信長戦線の一環としての行動である。しかし本願寺の動きを支えているのは諸国の門徒であり、今回の蜂起も天正八年八月の本願寺の退去まで、諸国の門徒に支えられた籠城戦のはじまりとなるものであった。

本願寺の戦争は諸大名との連携による信長との戦いであった。天正三年に大坂を攻められた本願寺は織田家と和議を結んだ。

しかし天正四年四月に交戦を再開した。前述の通り上杉家と加賀を仲介し謙信の助勢を得た本願寺は、東の織田家と敵対する諸大名及び、西の毛利家と手を組んだ。更に各地の門徒、特に紀州の雑賀衆の持つ近代兵器である鉄砲を駆使して石山本願寺にて籠城戦を続けた。『信長公記』には雑賀衆の用いた鉄砲が次のように記されている。

五月三日払暁ニ先ハ三好笑岩、根来、和泉衆、二段ニ原田備中、大和、山城衆致ニ同心一、彼三寺へ取懸候処、大坂、ろうの岸、木津両手より罷出推つゝミ、数百挺之鉄砲を以而散々ニ被ニ打立一、上方之人数崩れ懸り、

とあるように、信長は雑賀衆の鉄砲に苦しめられたことが分かる。織田勢に海上を封鎖された際は毛利家が村上水軍を前線に押し出し、物資面での援助を行った。しかし瀬戸内海に面し、海運技術が織田家より上にある毛利家の助力を受けていても勝つことはできなかつたのである。織田家は今回の戦のために九鬼水軍を編成し、鉄甲船という鉄板を纏い、大砲を放つ船を導入していたためである。『多聞院日記』において鉄甲船は次のように記されている。

堺浦へ近日伊勢ヨリ大船調付了、人数五千程ノル、横へ七間、豎へ十二三間も在之、鐵ノ船也、テツハウト
ヲラヌ用意、事と敷儀也、大坂へ取ヨリ、通路トムヘキ用ト云と

とある。木製が主流の造船技術しかなかった当時において鉄でできており、大砲が積める沈まない船という未知の存在は脅威であった。これにより毛利家は敗北し、天正七年に後退した。

こうして天正八年に顕如は信長と和睦し、石山の地を明け渡して鷲ノ森へと移った。和睦条件は神田千里氏が次のようにまとめている。

第一に本願寺を含めて教団全体を赦免し、その地位を保障すること、第二にその代償に大坂を引き渡し、出城の花熊・尼崎も引き渡すこと、第三に江沼・能海の加賀二郡は、大坂退城の後、本願寺が織田方の立場をとり続けた場合には返還する、以上である。

おおよそ十年におよぶ織田家と本願寺の戦い、石山合戦はこうして終了した。ただし、円満に解決したわけではなかった。津本陽氏はこの講和を信長の政略と捉え、次のように記している。

宗主顕如や上層部は「惣赦免」と加賀二郡返還のエサを突きつけられて講和に傾いたが、抵抗を主張する長男の教如は一揆勢と結んで教団を割った。宗主は「矢留め（停戦）」を下知し、教如は抗戦の檄を飛ばしたのである。信長の政略は、組織的な抵抗を内部から崩したにとどまらず、教団勢力の分裂という結果まで引き起こした。宗主父子はたもとを分かって大坂を去り、八十年前に蓮如が創建した石山本願寺は炎上、消滅した。

結果として本願寺は教団を分かれたれ、大坂を失った。しかし、教えが失われることはなかった。土地は失ったが、浄土真宗は失われず、現在に至るまで残り続けたのである。

第三章 本願寺の教えと戦争倫理

第一節 親鸞聖人の死生観

以下、親鸞の思想をふりかえり、戦争倫理との関連を考察する。

日野家に生まれた親鸞は出家した後、比叡山に登った。ここ比叡山は密教である天台宗を起こした最澄が修行の場として選び、また日本天台宗の本山とした。その比叡山においておよそ二十年間、堂僧として修行にはげんだのである。しかし親鸞は二十年間の比叡山での修行においてさとりを得られなかった。建仁元年、親鸞は下山し、京都市内にある六角堂に百日間参籠した。そして後に更に百日間源空聖人のもとに通って専修念仏を学んだ。この経験からわかることは親鸞個人としての死生観は成人期から老年期にかけて変化しているということだ。比叡山において自力聖道門の修行をしていた親鸞は下山し、他力本願の仏道を修した。その時の親鸞の仏道修行に伴う思想の変遷から見える死生観を武田未来雄氏は『親鸞における死生観——後世観を中心として——』において次のようにまとめている。

「『恵信尼書簡』に伝えられている六角堂参籠は、親鸞が自己の罪業の深さのために、そのような善業を修することが不可能であることに苦悩したと考えられる。聖徳太子示現の文や、法然の教えの言葉で表される内容は、正しく、善因楽果・悪因苦果の道理に反する往生の在り方であった。こうして親鸞は最初に祈られ

ていた後世観とは全く違う後世観に出遇ったのである。以後親鸞は「臨終の稱念をまつべからず」（『定親全三』七四―五）頁と言ひ、あるいは「臨終まつことなし、来迎たのむことなし」（『定親全三五九』頁と言ひ）ように、臨終の来迎を期待する必要の無いことを強調するようになる。このように親鸞の得た死生観の特徴は臨終の一念に集中する死生観から別離することであつたのである。」

このように親鸞の死生観は自力を離れ、他力を頼むものとなつた。従来は祈り、救いを待つ形態から離別した。更に武田未来雄氏は親鸞の死の捉え方をこのように述べた。

「多くの人々の死について、驚くべきことではなく、生死無常の道理であると言われる（原文ママ）いたが、その前に「死にあいて候うらんことこそ、哀れにそうらへ」と言われていた。親鸞の言う「死」とは「哀れ」であるが、「当然の道理」とも言われる。そこに二面性があることが窺われる。」

このように親鸞にとつての死は往生への手段などという苛烈なものではなく、哀れであり当然の道理という万人が感じうる静かなものだった。そして武田未来雄氏はこの二面性を次のように表している。親鸞は巨視的観点から死を当然の道理としながらも死という現象に涅槃に到る尊さを見出したのだ。ここで疑問となる点は後の浄土真宗の開祖である親鸞の死生観からは、かの大規模で凄惨な石山合戦の引き金となるものを想起させるものは希薄であるということだ。しかし浄土真宗の根底には親鸞の死生観が存在することを念頭に置く必要があるだろう。あくまで希薄であるからだ。悪人正機のように歪曲した捉えられ方をされた点から、死の尊さを悪用された

可能性がある。原田哲了氏の「江戸期における悪人正機の問題について」の初めには次のように述べられている。

「悪人正機説」といえば、主に『歎異抄』第三条の内容・表現によった考え方であり、親鸞の宗教思想を表す代表的な言葉となっている。しかし親鸞は「悪人正機」の語を用いず、『歎異抄』第三条にもそれはない。

このように明記もしていない文言があたかも本人が述べたかのように伝わってしまうという事実にも着目する必要がある。そうした親鸞の意を汲むはずの教団が結果として戦争へと向かい人を殺し、また殺されたのは何故だったのだろうか。前提として当然のことではあるが経年劣化や風化をしない物や概念はない。それが改良であれ改悪であれ、その場に留まり続けることは不可能だ。人間の生は歴史的に見ればそう長いものではないからだ。これらは人から人へと伝わった結果、予測不可能な変化を遂げる。それは悪人正機説の事例が補強している。残すことの困難さは銚純香氏が自身の論文において次のように述べている。

個人的な記録の特徴は、以後の活用や他者の評価を意識して書かれたもののみならず、意識せずに書かれたことばも、記録として残るといふ点である。意図に関わらず、結果として生活の「Log（軌跡）」が蓄積されていくといった記録の形態と、自伝や伝記のように意図的に「歴史」を残す記録の形態では、書くことの価値観や意味、内容が異なる。

親鸞の書き残したものが個人的な記録だと想定するのは『歎異抄』において親鸞は「親鸞は弟子一人ももたず候。そのゆえは、わが計らいにて人に念仏を申させ候わばこそ、弟子にても候わめ、ひとえに弥陀の御もよおしにあずかりて念仏申し候人を、「わが弟子」と申すこと、極めたる荒涼のことなり。」と記されているからだ。仏道者として弟子を持たない態度をとる人間が歴史を残す形態での記録をするとは考え難い。だからこそ多方向に、また多方面に曲解された親鸞の正確な事実とされるもの、異義が伝播したのだ。

第二節 戦争へ向かう真宗

「三人寄れば派閥ができる」という言葉が存在するように、人間が集団にいる以上如何なる形であれ争いが生まれるのは致し方ないことである。教団という形で集った門徒たちの戦争は、一向一揆と呼称された。一揆にも種類があるが一向一揆に関しては毛色が違う。そのことは五木寛之氏が著書にて述べている

リーダーだけでなく一般の人たちまでが一身を賭して、「進めば極楽、退けば地獄」をスローガンとして参加している。

と述べている。無形の世界による結束が、大名を恐れさせる団結力と戦力を創出したのである。極楽とは現世の生老病死のような概念的ではない、明日をも知れぬ生活という苦にまみれ、今に絶望している民衆にとっての最終目標と定義することが出来る。そのような集団の中で撤退を地獄などと定められれば、彼らは死後にまで希望を失うこととなる。そのような信教に基づかない生活の中での心の余裕の無さも一向一揆の一因であるといえる。

更に、加賀一向一揆の戦勝から真宗の仏教者が戦争を厭わない姿勢と雰囲気が生み出されていることにも着目している。神田千里氏の著書にて次のように記されている。

永正十七年八月、実如は長尾為景が越中へ侵攻したことに對して、もし万一、加賀へも侵攻してきたならば為景は紛れもない「法敵」であるから、その場合には「女・童」に至るまでも矢を捨て、一命を捨てる覚悟で戦わなければならないと述べている（『加州御教誠御書』八月十八日実如書状）。さらにその心がけのない者は「あさましい者」であり、「仏法」のためには命を惜しんではならない、と下知するよう本泉寺蓮悟に指示している（同上）。この命令の背景は分からない点が多いが、少なくとも越中の政治的影響をめぐる加賀と越後の抗争を「仏法」の安危に関わるものと主張していることは注目される。

ここでは「法敵」という単語が用いられている。本願寺は俗世において、武力で実効支配したにすぎない自領への侵略行為に對して拡大解釈を用いている。即ち本願寺の敵を仏法の敵と置換することで、門徒たちを戦力としているとみることが可能となるのだ。これらの要素こそが本願寺が石山合戦へと進んでしまった原因である。

しかし、石山合戦において顕如が法敵を滅ぼし、自領を安堵しようとしていたとは考え難い。それは親鸞の教えに順じたものではないからだ。では何故「進めば極楽、退けば地獄」などと門徒たちは掲げ戦っていたのか。それは神田千里氏が次のように述べている。

本願寺が要求したのは、凡夫が極楽往生できる教えを説いた親鸞とその家、すなわち本願寺への恩返しとして、命を賭して戦うことであった。

本願寺は教義という複雑なものではなく、恩返しという無教養な民にも明確に伝わる形での戦争参加を求めたのである。簡易なものが好まれるのは御文章での布教からも窺える事実であり、心が納得したのであればその恩返しに命を懸けることは理解できない未知の感情ではない。どのような恩恵であれ、有形無形を問わない恩人への感謝の気持ちは時代によって変遷するものではないからだ。

結論

筆者は論文を通して一つの事実を自覚した。それは石山合戦、宗教と大名の戦争は浄土真宗と織田信長だから起きたのではないということだ。第一章で触れたように、蓮如は加賀を支配し、蓮如が去った後も門徒が支配を盤石なものとした。そして以降石山合戦の終了時まで保持し続けた。つまり本願寺は他の大名と同様に領土を持っていた。つまり、本願寺はこの時仏教者として戦争を行ったのではない。しかし事実として当時、強大な力を保持していた織田家は南蛮渡来品を多く運び込むキリスト教を重用していた。その光景はキリスト教に信教の重点を置いているように見えたと推測できる。浄土真宗を含む仏教は存続の危機に瀕していると考えerことは当然の帰結である。だが顕如が鷲ノ森へ退去して以降、石山合戦の勝者である信長が仏教を根絶させたという事実はない。確かに和睦条件に本願寺の安堵はあるが、仏教を本気で滅ぼす気があるならば講和など守る必要はない。

更に大坂を明け渡すという条件での双方が呑んだ講和からも、一大名として織田信長と戦を続けたと見ることが出来る。当時の大名の講和において土地の割譲によって講和が成ることは通例であったからだ。すなわち本願寺にとって石山合戦は、仏敵を葬るための聖戦ではなく、当時の大名と同じく本願寺という家の威信をかけた戦であったということである。

註

浄土真宗本願寺派総長石上智康 『浄土真宗聖典―註釈版 第二版―』一〇八四頁
加茂順成 『真宗的伝道―「御文」と「講」の仕組みに学ぶ―』五八七頁

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk/60/2/60_KJ00007978235/_pdf/-char/ja 二〇二〇年四月十六日

梯實圓・福岡光超・金龍静 『蓮如上人―その教えと生涯に学ぶ―』一〇六頁・一〇七頁
同右一〇八頁

吉川圭三 『中世社会と一向一揆』六十二頁・六十三頁

今田達 『真宗の風景 北陸一揆から石山合戦へ』八十二頁

神田千里 『戦争の日本史』一四一―一四二頁と石山合戦』一五五頁・一五八頁

山科言継 『言継卿記・第四』四四六頁

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/1919259/231> 二〇二〇年四月十六日

同右五二八頁 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/1919259/272> 二〇二〇年四月十六日

同右四四五頁 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/1919259/230> 二〇二〇年四月十六日

神田千里 『戦争の日本史』一四一―一四二頁と石山合戦』一五七頁

国毎の門徒集団の宛所は先ほどみた十月七日の頭如消息のように「筑後坊主衆・門徒中」「讃岐坊主衆・門徒中」などがあり、同様のものに「能州坊主衆中・門徒衆中」「越前国坊主衆中・惣門徒中」「若狭国坊主衆中・門徒衆中」などのものが見られる。これらの宛所をもつ御書は、その国の門徒団の棟梁である寺院に送付された。たとえば「越中国坊主衆中・門徒衆中」宛のものは、越中国にある本願寺一族寺院の勝興寺に届けられている。

神田千里 『戦争の日本史』一四一―一四二頁と石山合戦』一五九頁

霜月十六日 丹羽五郎左衛門爲御奉行被仰付鍾縛丈夫にうたせ勢田に舟橋懸けられ往還輒様に村井新四郎
埴原新左衛門爲御警固置せられ 信長公之御舎弟 織田彦七 尾州之内こきゑ村に足懸拵御居城之處に志賀御陣

御手塞之様躰見及申長島より一揆令蜂起取懸逐日攻申候既城内へ攻込也一揆之手にかゝり候てハ御無念と思食御
天主へ御上り候て

霜月廿一日 織田彦七御腹めされ無是非超目也

太田牛一 『信長公記・卷之上』二十八頁・二十九頁

○二〇年十二月十日

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/781192/34> 11

同右四十四頁 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/781192/49> 一〇二〇年十二月十日

神田千里 『戦争の日本史¹⁴ 一向一揆と石山合戦』一八七頁

金龍静・木越祐馨 『顕如 信長も恐れた「本願寺」宗主の実像』八十七頁・八十八頁

神田千里 『戦争の日本史¹⁴ 一向一揆と石山合戦』一六四頁

そもそも、当流の他力信心のおもむきをよく聴聞して、決定せしむるひとこれあらば、その信心のとほりをもつて心底にをさめおきて、他宗・他人に対して沙汰すべからず。また路次・大道われわれの在所などにても、あらはに人をもはばからずこれを讃嘆すべからず。つぎには守護・地頭方にむきても、われは信心をえたりといひて疎略の儀なく、いよいよ公事をまつたくすべし。また諸神・諸仏・菩薩をもおろそかにすべからず。これみな南無阿弥仏の六字のうちにもれるがゆゑなり。ことにほかに王法をもつておもてとし、内心には他力の信心をふかくたくはへて、世間の仁義をもつて本とすべし。これすなはち当流に定むるところの掟のおもむきなりとこころうべきものなり。

『浄土真宗聖典―註釈版 第二版―』一一七頁・一一八頁

それ、当流に定むるところの掟をよく守るといふは、他宗にも世間にも対しては、わが一宗のすがたをあらはに人の目にみえぬやうにふるまへるをもつて本意とするなり。しかるにちかごろは当流念仏者のなかにおいて、わざと人目にみえて一流のすがたをあらはして、これをもつてわが宗の名望のやうにおもひて、ことに他宗をこなしおとしめんとおもへり。これ言語道断の次第なり。

『浄土真宗聖典―註釈版 第二版―』一一二八頁

神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』八十頁―一〇五頁

太田牛一 『信長公記・卷之上』（我自刊我本）三十頁

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/781192/35> 一〇二〇年十一月十日

神田千里 『戦争の日本史¹⁴ 一向一揆と石山合戦』一七二頁

同右一七六頁

大桑斉 『大系真宗史料 文書記録編¹² 石山合戦』四一二頁・四一三頁

同右一二四頁

神田千里 『戦争の日本史¹⁴ 一向一揆と石山合戦』一九八頁

大桑 齊 『大系真宗史料 文書記録編 12 石山合戦』 四一五頁

英俊 『多聞院日記・第3巻(巻24-巻31)』 二二一頁・二二二頁

https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1207471/20_110110 二〇一〇年十二月二十一日

神田千里 『戦争の日本史¹⁴ 一向一揆と石山合戦』 二二二頁

今田達 『真宗の風景 北陸一揆から石山合戦へ』 一五九頁

武田未来雄 『親鸞における死生観——後世観を中心として——』 五四八頁

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk/56/2/56_KJ00005180752/_article/-char/ja/

二〇一〇年八月二十日

同右五五〇頁 https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk/56/2/56_KJ00005180752/_article/-char/ja/

二〇一〇年八月二十日

原田哲了 『江戸期における悪人正機の問題について(第六部会、特集「第六十四回学術大会紀要」)』

二〇二頁 https://www.jstage.jst.go.jp/article/rsjars/79/4/79_KJ00004331563/_pdf/-char/ja

二〇一〇年八月二十三日

鏝純香 『記録をふり返ることと語ることの意味——自己教育の観点から考える——』 二二三頁

<http://hdl.handle.net/2433/174243> 二〇一〇年八月二十三日

五木寛之 『隠された日本 加賀・大和 一向一揆共和国 まほろばの闇』 七五頁

神田千里 『戦争の日本史¹⁴ 一向一揆と石山合戦』 一〇四頁

同右 二〇五頁

参考文献

書籍

今田達 『真宗の風景 北陸一揆から石山合戦へ』 株式会社同朋舎出版 一九九〇年

五木寛之 『隠された日本 加賀・大和 一向一揆共和国 まほろばの闇』 株式会社筑摩書房 二〇一四

年
梯實圓・福間光超・金龍静 『蓮如上人——その教えと生涯に学ぶ——』 本願寺出版 一九九五年

神田千里 『頭如——仏法再興の志を励まれ候べく候——』 株式会社ミネルヴァ書房 二〇二〇年

神田千里 『戦争の日本史¹⁴ 一向一揆と石山合戦』 株式会社吉川弘文館 二〇〇七年

梯實圓・福間光超・金龍静 『蓮如上人——その教えと生涯に学ぶ——』 本願寺出版 一九九五年

金龍静・木越祐馨 『顕如 信長も恐れた「本願寺」宗主の実像』 株式会社宮帯出版社 二〇一六年
吉川圭三 『中世社会と一向一揆』 株式会社吉川弘文館 一九八五年

資料

英俊 『多聞院日記・第3巻(巻24-巻31)』 三教書院 昭十至十四
大桑斉 『大系真宗史料 文書記録編12 石山合戦』 株式会社法藏館 二〇一〇年
太田牛一 『信長公記・卷之上』(我自刊我本) 甫喜山景雄 一八八一年
北西弘先生還暦記念会 『中世社会と一向一揆』 株式会社吉川弘文館 一九八五年
浄土真宗本願寺派総長石上智康 『浄土真宗聖典―註釈版 第二版―』 本願寺出版 二〇〇四年
山科言継 『言継卿記・第四』 図書刊行会 1915年

論文

銚純香 『記録をふり返ることと語ることの意味―自己教育の観点から考える―』 京都大学大学院教育学
研究科生涯教育学講座生涯教育フィールド研究編集委員会 二〇一三年
加茂順成 『真宗的伝道―「御文」と「講」の仕組みに学ぶ―』 印度學佛教學研究六十巻二号 二〇一二
年
武田未来雄 『親鸞における死生観―後世観を中心として―』 印度學佛教學研究五十六巻二号 二〇〇
八年
原田哲了 『江戸期における悪人正機の問題について(第六部会へ特集第六十四回学術大会紀要)』 二〇〇
六年 七十九 巻四号